真・恋姫†無双～冷静と情熱の狭間～

§ K&N §

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双～冷静と情熱の狭間～

【Nコード】
N6996X

【作者名】
§K&N§

【あらすじ】
「俺こと北郷一刀は孤独だった。
両親と妹を事故で失い、じいちゃんに引き取られたが、じいちゃんも俺を残して逝ってしまった。
そしてあの日、俺はじいちゃんの遺言に従い一振りの刀を手にしたんだけど………

今思えば、あれが全ての始まりだったんだ。」

手を抜くつもりはありません。

全力を尽くします。

原作より強く賢い一刀君が見たい方は、ぜひ読んでみてください！

ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

皆さんこんにちは！

§Ｋ＆ａｍｐ；Ｎ§と申します。

よろしくお願いします！

prologue

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ…………

心電図の規則正しい電子音を聞きながら、病室のベッドの脇にある椅子に深く腰掛け、俺はじいちゃんの手を両手で握っていた。

「じいちゃん……」

おもわず声が漏れる。

ベッドで静かに眠るじいちゃんは、医者の話では今夜が山らしい。

思い返せば、俺はじいちゃんがいなかったらどうなっていたんだろうか？

９歳の時に、両親と俺と妹が乗る車にトラックが突っ込み、両親と妹はこの世を去ったが、神の気まぐれか、俺だけが生き残った。

その後、親戚達と共に葬儀をしたけど、俺を引き取ってくれる人は誰もいなかった。

もともと俺の両親は駆け落ちをして結婚したので、親戚からしたら俺は厄介なお荷物だったらしい。

周りから冷たい視線を受ける中、そんな俺を引き取ってくれたのがじいちゃんこと、北郷一心さんだった。

じいちゃんは俺の父親の叔父に当る人で、性格は正に現代の生きる侍そのもの。

北郷家の先祖が開祖である北郷御影流剣術の師範代をしていたが、弟子もおらず、独身のまま鹿児島の山奥で修業に明け暮れ、親戚達からもうとまれていたようで、厄介者は厄介者に任せるのが一番だったらしい。

そして俺はじいちゃんに引き取られ、一緒に鹿児島で暮らすこととなったんだけど、引き取られた当初、俺は事故のショックで心を閉ざし、誰とも関わろうとしなかった。

そんな俺が立ち直ったきっかけは、じいちゃんが師範代を務める北郷御影流剣術を始めたことだった。

地元の学校に通いながら、じいちゃんと共に剣術の修業に明け暮れる内、次第に心を取り戻し、５年の歳月を有したが、俺は両親と妹の死を乗り越えることが出来た。

また、毎日剣術の修業に明け暮れる内に、どんどん腕も上がっていき、つい半年前、１５歳の誕生日に北郷御影流の免許皆伝をじいちゃんから言い渡された。

免許皆伝を言い渡した時、じいちゃんは喜んでくれたし、何より俺自身認められたことは本当に嬉しかった。

そんな矢先、じいちゃんが道場で倒れた。

救急車を呼び急いで病院に向かい、診察を受けた。

その結果は心筋症。

長年に渡る激しい修業が心臓に負担をかけ、もはや心臓が限界らしい。

そして今に至る。

「うっ……」

目の前のじいちゃんの瞼が微かに開く。

「っ！　じいちゃん！」

おもわず身を乗り出し叫んだ。

「一刀か……」

普段のじいちゃんからは想像も出来ない程弱々しい声をあげる。

じいちゃん……もう永くないな…。

くそっ、泣くんじゃねぇぞ俺！

笑顔で見送ると決めただろう！

「じいちゃん……体調はどうだ？」

俺は努めていつも通りを装う。

正直、気を緩めたら泣きそうだ。

「………一刀」

「…何だ？」

「私はもう永くないのだろう…？」

「っ！？

おもわず息が止まる。

「私の体のことは…私が一番わかる。」

やめろ。

「お前が立派な剣士になるのを見届けられないのは残念だが……まあ、致し方ないな。」

やめてくれ！

「……フッ、何を泣いておる？」

「えっ？」

気付けば一粒の雫が頬を流れていた。

「一刀……私はお前に免許皆伝を言い渡した。だが、その証となるものをまだお前に授けていない。そうだな？」

「あぁ…。」

「そこで、私はお前の師匠として、道場の神棚に奉ってある刀をお前に与え、それを免許皆伝の証とする。」

ゾクリとした。

じいちゃんのその言葉は、俺が真の意味で北郷御影流を継承するということに違いないのだから。

あの刀にはそれだけの価値があるのだ。

「…一刀、死とは人間であればいつか必ず訪れる別れだ。だが、それよりも大切なものがある。何だかわかるか？」

じいちゃんは臨終間際とは思えない程鋭い眼差しでそう俺に尋ねた。

だけど……俺にはわからねぇよ…。

「死んだら終わりじゃねぇか……。」

もう涙は止まらない。

声も震えている。

「それは違う。終わりではない。私が死んでもお前がいる。お前は私の業を、剣士としての心得を引き継いだ。一刀、お前はもう、北郷御影流を修めた侍なのだ。」

衝撃的だった。

俺が……侍?

「良いか一刀、お前が学んだ北郷御影流もまた、そうして代々受け継がれたものなのだ。私が受け継いだそれもお前に渡せた。私はそれで満足だよ。」

そう言ってじいちゃんは穏やかに笑う。

「でも…俺はまだまだ未熟だよ? 人に教えられる余裕なんてないよ。」

そう、未熟なのだ。

俺自身、侍と呼べる程、精神も業も完熟していないと思ってる。

ましてやそれを俺が誰かに伝えていくなんて……

「ハッ! そんなこと、今のお前に期待してなどいないわ。それにお前は、免許皆伝になったからといって、修業を止めるか?」

「それはない。断言出来る。」

「ならばそれで良い。お前自身が誰かに教えていけると思った時にやればよい。それまでは自らを高めよ。お前はこれからなのだからな。それに、たとえここで私の肉体が滅びても、魂はお前と共にある。だから大丈夫だ。」

ニッコリと笑いながら、じいちゃんは一通り言いたいことを言うと、疲れたように目を閉じた。

俺はこれから……そうだ。

俺は何をすべきか、これからゆっくり考えていけば良い。

もう涙は出ない。

悲しくないと言えば嘘になるが、それより今じいちゃんに伝えなきゃいけないことがある。

「じいちゃん…」

「……何だ？」

じいちゃんがこちらへ振り向く。

「この6年間、貴方から学んだことは俺の誇りです。本当にありがとうございました。」

じいちゃんの目を見てそう言って、深々と頭を下げた。

じいちゃんは驚いた顔をしていたが、すぐに笑顔になって、

「あぁ……安心した………。」

そう呟いて、穏やかな顔をしながら永い眠りについた。

じいちゃんの葬儀は、亡くなった翌日に近所の方々が中心になって行ってくれた。

葬儀の様子を見て、あらためてじいちゃんがどれだけ近所の方々に慕われていたかがよくわかった。

それから一週間、親戚達に連絡をして回ったが、誰ひとりとしてじいちゃんの墓参りに来なかった。

まあ、俺もじいちゃんも、あんな薄情な親戚に来られても嬉しくないけどね。

そして一週間経った今、白い胴着に黒い袴を着た俺はじいちゃんの

道場にいる。

理由は一つ、じいちゃんから授かった刀、「千代桜（ちよざくら）」を神棚から降ろすため。

台座に乗り、神棚の刀を手に取る。

ずっしりとした重量感は刀自体の重さだけでなく、歴史の重みもあるのだろうか。

それなのに、ぴったりと俺の手に吸い付く感覚もある。

鞘はワインのように赤黒いが、漆塗りなのか赤黒さを引き立てるように艶やかで、鍔には龍の彫刻が施してあり、職人の技が際だっている。

そして、柄の部分には刀の名と同じ桜色の当て布が巻いてある。

じっくりこの千代桜を見たことはなかったけど、あらためてこの刀を手に取り、正直俺は気圧されている。

これが受け継がれ続けた重み。

だけど、俺はコイツを離すつもりはない。

じいちゃんの葬儀の時、俺はじいちゃんの誇れる侍になると決めた。

そのためには、今までのような木刀だけの鍛練じゃダメだ。

北郷家に代々伝わるこの刀を使いこなしてこそ、真の意味で北郷御

影流の継承者になれると信じている。

台座から降り、俺は道場の真ん中で立ち止まると、柄に手をかけた。

……じいちゃん、見ていてくれよ。

俺は……じいちゃんを超えてみせる！

高ぶる気持ちを抑えるように深呼吸をすると、俺はゆっくりと千代桜を抜いた。

シャリン、と金属が擦れる独特の音が道場に響いた。

そして、抜いた千代桜の刀身を見た時、俺は言葉を失った。

微かに青みがかり透き通った刀身は、鏡のように磨き貫かれており、その刃は触れたもの全てを切り裂くと思えるほど鋭利である。

なんて美しい……。

素直にそう思った。

だが、その時、異変は起きた。

キィィィィン！

刀身からまばゆい光がほとばしる。

「えぇっ！？ちょっ！？いきなり何が！？」

待て待て待て！

何だこれっ！？

ってか、これ刀に吸い込まれる！？

「うわぁぁぁぁぁ！！！」

断末魔が道場に響く。

光が止んだ時、そこにはもう誰もいなかった。

prologue（後書き）

今作品の一刀君はそこそこ強いです。

ただ、現段階では一般兵より強いといった程度。

当然将軍クラスには太刀打ち出来ません。

徐々に強くしていきたいと思います。

そして、ネタバレになってしまいますが、ここの一刀君の一番の売りは、御遣い補正がないことです。

まあ、要するにここの一刀君は天の御遣いなんていう胡散臭い存在にはならないということですな（￣▽￣；）

ならべくご都合主義にはしないように気を付けますので、どうか皆さんも楽しく読んで頂けたら幸いです。

～第一話～侍、荒野に立つ（前書き）

一人称ムズイ（｜ω｜；）

とりあえず出来ました。

どうぞ！

～第一話～侍、荒野に立つ

「…うっ……」

一体どれだけの時間気を失っていたのだろうか…。

目を覚ました俺は、先程のまばゆい光のことを思い出す。

刀から光が溢れ出るとか何てファンタジー？

何故千代桜から光が出たのか……考えてもわからないので、とりあえず自分の体に異変がないか確認することにした。

着ている服はさっきと変わらず、白い鍛練用の胴着に黒い袴。

見た目的に怪我もなく至って健康体である。

俺は自身の体に何の問題もなく、とりあえずは安心した。

まあ、安心はしたのだが……一つだけ困ったことがある。

一つとは言ったものの、その一つが今のところ一番問題なのだ。

俺は一体誰に説明しているのかはわからないが、とりあえず、一つだけ言わせてくれ。

「ここ何処だぁぁぁ！！！」

俺の魂の叫びが虚しく荒野に響いた。

数時間後、とりあえず落ち着いた俺は、腰に下げた刀、千代桜を揺らしながら宛てもなく荒野を歩いていた。
ちなみに、千代桜は何故か鞘に納まって俺の足元に転がっていた。

……もう訳がわからん…。

俺の目の前には、見渡す限り荒野が広がり、遥か先には岩で出来た柱なのか山なのかよくわからないものが鎮座しているのみである。

「はぁ……一体どうなってんだよ…？」

今日何度目かわからない溜息と呟きが漏れる。

その時、俺は遠くからこちらへ走り寄ってくる3人組を見つけた。

やっと人がいた！

宛てもなく歩くことにも飽きていた所だったので、俺は嬉しくなって叫んだ。

「おーい！こっちだこっち！」

近付くにつれ3人の容姿がハッキリしてきた。

一人はガッシリとした体つきの中年の男で、その両隣には身長が小さくギョロ目の男と関取のように太った男という何とも凸凹した3人である。

そして、極めつけはその格好。

3人とも、黄色い頭巾をかぶり、簡易的な鎧のようなものを纏(まと)い、腰には中華風の剣を下げている。

……コスプレだろうか？

まあ、格好に関しては現在の自分も人のことを言えないので黙っておこう。

それより、これでこの荒野から抜け出せる！

「良かった！実はこの辺りで迷っ」

「おう、兄ちゃん！金目の物があるなら大人しくだしな。」

ん？

この人達はそういうキャラのコスプレなのか？

なら！

「ふっ…俺を誰だと思っている？天下の剣豪、北郷一刀様だぞ！」

仮面ライダーの変身ポーズを取りながら、俺はそう叫んだ。

こういうの一度やってみたかったんだよな！

だけど、目の前の３人は目を点にしてア然としている。

………やべぇ……俺は何処で間違えた？

もしかして、この人達は大人し目の人なのか…？

「てめぇが誰だか知らねぇが、ふざけてるなら殺すぞ？」

中年の男が腰の剣を抜き、それに従い後ろの二人も剣を抜く。

………待て待て待て！

それ明らか本物じゃねぇか！

「ちょっ、コスプレじゃなかったの！？」

「こすぷれ？兄貴、コイツ何言ってんすかね？」

「ハッ、んなの知るか。おいガキ、良いから金目の物を出せ！」

ギョロ目の男が中年の男にそう言うが、中年の男はそれを鼻で笑いながら俺に剣の切っ先を向ける。

「………あれ？もしかして、アンタ真面目に言ってる…？」

そんな…まさか……。

「当たり前だ！良いから早く出せ！」

「出せ！なんだな…。」

中年の男と太った男がまくし立てる。

………オーケー。

少しクールになれ俺。

状況を整理しよう。

荒野で人発見↓金目の物よこせと言われる↓俺がふざける↓相手は激怒して剣を抜く↓剣は本物↓真面目かどうか聞いて当たり前と言われる。

あぁ………なるほど。

「本物の強盗！？」

マジかよ！？

これ洒落にならない状況なんじゃゃ……。

「いやいやいや！見ればわかるでしょ！金目の物なんてないよ！」

携帯や財布とかは俺の部屋だし、だいたい金目の物なんて胴着に着

替えた時に全部置いてきたよ！

「あぁ？あるじゃねぇか。てめぇの腰にある剣は何だ？」

腰にある剣？

……まさか、千代桜のことか…？

「………それは……それだけは出来ない。」

「……何？」

中年の男は怪訝な表情している。

まさかこの状況でそんなことを言われるとは思ってなかったんだろうな…。

だけど、

「これはじいちゃんから授かった大切な刀だ。他の物だったらまだ考えたけど、これだけはダメだ。……どうしてもって言うなら…」

俺は千代桜の柄に手をかける。

そう、これだけは譲れない。

これは北郷御影流を継承した証だから…。

それを奪おうと言うのなら……斬り捨てるまでだ！

俺は勢いよく千代桜を抜いた。
太陽の光に反射してキラキラと輝く刃を、俺は３人に向け正眼に構える。
俺の気配が変わったのを前の３人も気付いたのだろう。
それぞれ己の剣を構え直す。
だが、３人とも俺の気迫に負けて腰が退けている。
「おっ…おい！お前ら、行け！」
「「っ！」」
中年の男に激を飛ばされ、後ろの二人が突っ込んできた。
…遅い。
「ぎゃっ！」
「へぶっ!?」
ギョロ目男が剣を振りかぶった瞬間、俺は開いた胴に横薙ぎの一閃をみまう。
そして、そのまま勢いを殺さず、遅れてきた太った男の胴を通り抜けざまに斬り捨てた。
ドサリと二人が倒れる音が聞こえる。

俺の眼前にいる中年の男は、目の前の光景に目を見開き、完全に戦意が喪失しているようだ。

「おい。」

「ひぃっ!?」

俺が声をかけると、中年の男は引き攣った顔を向ける。

「そこの二人を連れてどっかに行きな。峰打ちだから死んではいないからね。」

俺はそう言いながら、倒れてる二人に目を向ける。

二人は痛がって悶絶はしているものの、やはり死んではいない。

「どうする?まだやるってんなら……」

刀を握り直してそう聞くと、中年の男は慌てた様子で倒れた二人を起こして走り去って行った。

「はぁ……」

溜息をつきながら、静かに納刀する。

まさか本物の強盗に襲われるとは……。

生まれて初めて強盗に襲われたけど、本当に千代桜持ってて良かった…。

でも何か忘れてるような気がするんだよな……。

…………っ！？

「俺アイツらにここが何処か聞いてねぇ！」

おもわず叫び声を上げ、頭を抱えた。

また振り出しかよっ！？

「ぐぬぬぬ……」

唸りながら己の馬鹿さ加減に自己嫌悪していると、ふと遠くから聞き慣れない音が聞こえた。

「これは………」

音の聞こえる方に目を向けると、遠くの方で砂煙が見える。

それにこの音は……馬の蹄の音だ。

音と砂煙はどんどん近付いてくる。

目を凝らしながら砂煙を凝視すると、何人もの人が乗っているのがわかる。

またさっきみたいに強盗紛いな奴じゃないだろうな…？

でも、このままじゃどうしようもないしなぁ……。

仕方ない。

また声をかけるしかないか…。

「おーい！」

俺は馬に乗った軍団に向け、大声で呼び掛けた

side　???

「天の御遣い？」

私は部下の言葉に眉をひそめた。

「ここ最近、民達の間ではこの話題で持ち切りです。ここまで噂になっていると、あながちその噂も嘘ではないのではないか、と私は考えています。」

我が部下、莉昂（りこう）は報告書を見ながら私にそう語りかける。

「ふむ……話はわかったが、貴公は私にどうして欲しいのだ？」

イマイチ意図が見えん。

こやつのことだ。

意味もなくこのような話をする奴ではない。

だが一体何が……？

「私の意見としましては……“天の御遣い”を見付け次第保護するべきかと。」

真剣な表情で莉昂は言った。

「何故だ？まさかその“天の御遣い”の威光を使い天下統一……なんて言わないだろうな？」

私は怪訝な表情を浮かべながら莉昂に問う。

そう、私に天下統一などという野望はない。

今、任されている幽州の統治ですらままならないのが現状なのだ。

故に、私にはこの大陸を統一するに値する器量はない。

それは私自身が一番よくわかっていることだ。

だからこそ、わざわざ“天の御遣い”を保護する理由がわからない。

「そうではありません。むしろ、幽州の周辺にいる諸侯に、“天の御遣い”の威光を使わせないために先手を打つのです。もし、義遠様が“天の御遣い”を保護した場合、周辺の民達に“我等は天の威光と共にこの地を統治する”とでも言っておけば、諸侯達も迂闊に我等へ出兵出来ないでしょう。民達の反感はならべく買いたくないでしょうから。」

莉昂は私の目を真っすぐ見つめてそう言った。

「なるほど……筋は通っているな。ところで、この話は他に誰が知っている？」

「今のところ、私と義遠様、そして権陽様だけです。」

権陽か……。

「その権陽はどう言っておった？」

「権陽様ですか？権陽様は、義遠様の判断に従うとのことでした。」

「そうか……。」

奴も反対しないということは、恐らくそれなりに効果があるという

ことなのだろう…。

「良かろう。この件は我が名の元、糜竺、貴公に一任する！」

「御意！我が主、陶謙様の名に恥じぬよう、全力を尽くします！」

糜竺こと、莉昂はそう言って一礼すると、私の執務室から出ていった。

それにしても……天……か。

思い出すのはあの男。

たった2年だが、若かりし頃の私と権陽と共に戦場を駆け抜けた親友であり、流星と共に現れ、光の中に消えていった、誇り高き剣士。

３０年程経った今でも、あの男の姿は忘れられない……。

……いかんな。

まだ政務が残っているというのに、感傷に浸ってなどおれぬ。

そう思いながら、私は机に乗る書簡に手を伸ばした。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　？？？

先程、莉昂から義遠様が“天の御遣い”を保護することに決められたという報告を受け、私はある思いを抱いていた。

恐らく、義遠様も同じことを考えていらっしゃるだろう。

私と義遠様にとって、“天”という言葉は特別だ。

まだ私が１０代半ばの、義遠様に仕えて間もないあの頃、ちょうどその時期に出会ったのが、彼だった。

たった一降りの剣のみで、現在の我等の未来を切り開いた恩人とも言えるお方。

流星と共に現れ、光の中に消えた彼は、まさしく天から遣わされたと言わざるを得ないほど気高かった。

たった2年の月日だったが、彼の考え方は今の私の根本とも言える程、影響を及ぼしてしている。

あれから３０年、愛する妻と息子が出来るなど……あの時の私からすると想像も出来ないだろうな。

そう思いながら、私は一人苦笑していると、

「親父！入るぜ！」

乱暴に扉を開けて、我が息子が入ってきた。

「士陽（しよう）……お前は礼儀というものを知らんのか？人の部屋に入る時は、一言声をかけろといつも言っているだろう。」

あまりにも礼儀知らずな入り方をする息子に呆れながら、私は息子を睨みつける。

「何怒ってんだよ。それに、ちゃんと声はかけたぜ。入るってな。」

我が愛する妻から受け継いだ赤髪を揺らしながら、何故か威張ってそう言う息子の姿に頭が痛くなる。

「……まあ、良い。して、用件は何だ？」

「〝天の御遣い〟の話だ。何でそんな胡散臭い奴を保護するために、俺がソイツを探さなきゃならねぇんだよ！莉昂の兄貴から、親父が俺をその役に推薦したって聞いたぞ！」

なるほど、そういうことか。

「それはお前が適任だからだ。賊風情には遅れを取らぬ実力を持ち、かつ我が軍で単独で動き回れるのはお前だけだ。だからお前を推薦したのだ。」

私がそう言うと、士陽はいかにも不服そうな顔をする。

「おいおい、何で俺が単独で動けるんだよ。俺の部隊はどうすんだ？」

確かに最もらしい言い方だが、私は知っている。

「ほう…？お前、私が知らぬとでも思っているのか？お前の部隊はほぼ莉昂が調練しているそうじゃないか？」

「うっ!?」

気まずそうな顔をする士陽。

士陽が調練をサボっている話はすでに所々から聞いている。

まったく……その話を聞かされる私の身にもなれ、馬鹿者が！

「いや、あのな親父？あれは莉昂の兄貴が…」

「言い訳はいいから、とっとと準備をせぬか！この馬鹿者め！」

「りょっ、了解！」

慌てて私の部屋を部屋を出る息子の姿に、おもわず溜息を漏らす。

その時、扉の外に人の気配を感じた。

「陳珪(ちんけい)様、入ってもよろしいでしょうか？」

「構わん、入れ。」

そう命じると、部下が部屋に入ってくる。

「あの……ここに来る前に、陳登殿が半泣きで走り去って行きましたが…大丈夫なのですか？」

「……構わん、ほって置け。」

息子の情けなさに再び頭痛を感じるが、無視して部下からの報告に私は耳を傾けた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　陳登

親父からの指示―という名の命令―で、俺はここ数日、幽州内のあらゆる場所で、“天の御遣い”に関する情報を探した。

莉昂の兄貴からは、もし本人を発見したら、至急城に連れて来いって言われた。

だが、得る情報はいつも一緒で、有名な占い師がそう言ったから、だそうだ。

………兄貴よ、いくらなんでも無謀過ぎねぇか？

つか、占い師マジでふざけんな！

てめぇが適当なこと抜かすから、俺がこんなことする羽目になっただろうが！

だいたい、容姿なり持ってる物なり、何かしらの情報がねぇと探しようがねぇよ！

まあ、何の情報もないからこそ、誰かが集めなきゃいけないんだろうけど……。

何もそれが俺じゃなくても良いだろうが！

しかも兄貴も情報を集めてるなら、俺の意味なくねぇか！？

心の中で一人ぶつくさと文句を言いながら、俺は馬の上で顔をしかめる。

「これだけ探していねぇんだ。帰っても文句は言われねぇはずだ。」

そう独りごちて、俺は眼前にある義遠様の城に目を向けた。

視線を下げると、俺の乗っている馬も疲れの色が見える。

「ありがとな。もうすぐ城に着くから、着いたらゆっくり休みな。」

俺はそう言って馬の首をさすってやる。

その時、東の空からまばゆい光が辺りを包んだ。

「っ！？何だ！？」

太陽ではない。

太陽の光はこんなに白くまばゆくないから。

俺は東の空を見上げると、空から光の筋が降っている。

「あれは……流星！？」

おもわずそう叫んだ俺は、そのまま流星を見ていると、城から3里ほど離れた場所に落ちたのを確認した。

あそこは確か、荒野が広がる場所だったな……。

まあ、何でも良い。

今は親父達に知らせる方が先だ！

「悪いな、もう少し頑張ってくれ！」

俺はそう言って馬の腹を軽く蹴って、急いで城に戻った。

side out

side　陳珪

またもや突然乱暴に扉を開けて入ってきた息子に、今度こそゲンコツの一発でもくれてやろうとしたが、息子の話を聞いて、私は義遠様の下へ急いでいた。

“天の御遣い”の話、そして動乱の予感漂うこの後漢の時代、そして先程息子から聞いた流星の話。

いくらなんでも話が出来過ぎている。

これではまるで、３０年前の状況と同じではないか！

まさか……あの流星は彼だというのか！？

逸（はや）る気持ちを抑え、義遠様の部屋へ飛び込む。

「義遠様！」

「おぉ！権陽か！」

義遠様はもうすでに出陣の準備を終えているようだ。

義遠様の横には、莉昴も控えている。

「義遠様、士陽の話はもうお聞きになられましたか？」

「うむ……権陽、貴公はどう思う？」

複雑な心境なのだろう。

義遠様は顔を歪めながら私に聞いてくる。

「……正直、私も複雑です。あまりにも30年前と状況が似過ぎています。それに、流星の話が本当なら……“彼”の可能性も否定できません。」

私がそう言うと、義遠様は頷きながら私の意見に賛同する。

「やはり貴公もそう考えるか……。何はともあれ、実際に行ってみなければわからん。莉昂、城のことは貴公に任せる！義遠、貴公は私と共に、私の騎馬隊で流星が落ちた場所に急ぐぞ！」

「「御意！」」

side out

side 陶謙

あれから急いで出陣した我々は、士陽の言っていた城から3里ほど離れた荒野に来ていた。

「士陽、本当にこの辺りに流星が落ちたのか？」

隣で馬に乗る権陽が、士陽に確認している。

「間違いねぇよ。あんな異常な物が空から降ってきたんだ。忘れる訳がねぇ。」

そう言って、士陽も辺りを見渡す。

士陽は弓の名手である。

故に、その目の良さは信用に値する。

その時、

「っ!?親父、北東の方向に誰かいるぞ!」

「何っ!?義遠様!」

私は士陽が言った方向に目を凝らす。

……確かに、人影のようなものが見える。

「全軍、進路を北東に向け前進!」

まさか……本当に奴が帰ってきたというのか。

しばらく馬を走らせると、徐々に人影の姿が私の目にも見える程ハッキリとしてきた。

どうやら男のようだ。

それと同時に、向こうもこちらを呼んでいるのがわかる。

そして、男のすぐ側まで寄り馬を止め、あらためて男を凝視して、胸が締め付けられるのを感じた。

私の記憶が正しければ、男が着ているのは胴着、袴と呼ばれる服であり、その腰に下げているのは…………千代桜という名の刀剣であったはず。

隣をちらりと見ると、権陽も目を見開いて驚愕している。

まあ、そうであろうな。

私もかなり驚いている。

何せあの刀剣…………あれの所有者は、私の知っている中ではただ一人。

３０年前、光の中に消えた我が親友、“北郷　一心”が持っていた物なのだから……。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　一刀

俺の前で馬を止めた人達は、今だ何も言わずただ俺を見ている。
まあ、ぱっと見た感じ、さっきの奴らよりは気品を感じるし、強盗の類いではないだろう。
でも、何でさっきから何も言わずこっちを見るだけなんだろう？
特に真ん中にいる二人はすごく驚いた顔をしているのが、傍から見てもわかる。

うーん………気まずい。

とりあえず、声だけかけてみるか。

「あの……実は道に迷ってしまいまして、助けて頂けないでしょうか？」

俺の声を聞いて、真ん中の二人はビクリと体を震わせた。
その二人の内、じいちゃんと同じくらいの歳の、髭を伸ばした老人が馬を降り俺に近付いて、一言呟いた。

「……一心」

その一言に、俺も驚愕する。

「じいちゃんを知ってるの！？」

「じっ、じいちゃん？」

目の前の老人がまた驚いた顔をする。

この人、じいちゃんの知り合いなのかな？

良かった！

こんな訳のわかんない場所で、じいちゃんの知り合いに会えるなんてラッキーだ！

「あっ……まだ俺の名前を言ってませんでしたね。」

名を名乗る前からこんなに馴れ馴れしくしたら失礼だ。

じいちゃんがくれた誇り高い名を、ちゃんと名乗らなきゃな。

「俺は、北郷御影流剣術継承者、北郷　一刀です！」

向こうに控える方々にも聞こえるよう、俺は大きな声でそう言った。

「北郷　一刀……？それが貴公の名か？」

目の前の老人は依然として目を丸くしながらそう問いかけてきた。

「はい。それで……貴方は？」

「っ！？これは失礼した。私は陶謙、字は恭祖。今はこの幽州で刺史を務めさせてもらっている。」

……ちょっと待て。

今このご老人は何て言った？

俺の記憶が正しければ、陶謙って三国志にいたよな？

ってことはアレか？

さっきの黄色い頭巾の奴らは黄巾賊か？

なるほど、だから本物の剣なんて持ってたのか。

ハハッ、つまり俺はタイムスリップしたわけだ！

「どこまでファンタジーなんだコンチクショォォォォォォォ！！！！」

目の前の陶謙さん達は、どうしていいかわからず目を白黒させるのみだった。

～第一話～侍、荒野に立つ（後書き）

オリ設定満載ワロタなんですけど、大丈夫ですかね？

うーん、不安だ（－”－）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6996x/

真・恋姫†無双～冷静と情熱の狭間～
2011年10月21日03時10分発行